

序章 何のための本質観取か？

本質観取とは何か？

本質観取、それは、哲学二五〇〇年の歴史における、英知の粹を集めた思考の方法です。文字通り、物事の「本質」をつかみ取るための思考法。

それが本質観取です。

たとえば、幸せとは何か？ 自由とは何か？ 正義とは、愛とは、友情とは、希望とは、よい社会とは、よい教育とは何か？

こうした問いに、「なあるほど、それは確かに本質的だ」と誰もがうなづいてしまうような考えを見つけ出し、それを言葉に紡いでいくこと。それが本質観取の営みです。

この本質観取を、複数人の対話形式で行うと「本質観取の哲学対話」となります。

本書がお伝えするのは、主としてこの「本質観取の哲学対話」の理論および実践の方法

です。もっと平たく言えば、哲学的な思考と対話の、まさに「本質」、そして種々の「コ
ツ」をお伝えすること。それが本書の目的です。

本質観取は、私たちが自身の生き方や社会の問題などを考えるにあたって、きわめて意義深いものです。

たとえば「幸せ」とは何か？

この問いに深く答えることができたなら、私たちは、ではどうすれば幸せに生きられるかということもまた、力強く考えていくことができるようになります。逆に言えば、このことが曖昧だと、どのような生き方が幸せにつながるのか分からないまま、人生の道に迷ってしまいかもしれません。

あるいは「よい社会」とは何か？

その本質が分からなければ、どこに向かって共に社会をつくっていけばよいのかもまた、分からなくなってしまうます。

「よい教育」も同じです。その本質がまるで分からなければ、どのような教育を構想・実践していけばよいか分からないだけでなく、それぞれの教育観や教育方法をめぐって、深

刻な信念の対立に陥ってしまうことになるかもしれません。

もちろん、「絶対に正しい答え」があるわけではありません。でも、その上でなお、誰もが納得できる本質にどこまでも深く迫っていくこと。それが本質観取の営みなのです。

〳〵本質〳〵とは何か？

ここでいう〳〵本質〳〵とは、辞書的な定義とは少し違ったものです。

たとえば「正義」。辞書には、「人の道にかなって正しきこと」といった定義が書かれています。でもこれは、「正義」を別の言葉で言い換えたにすぎません。そもそも「人の道にかなう」とはどういうことでしょうか？ 「正しい」とは、いったいどういうことなのでしょう？

本質観取が挑むのは、そのような意味の本質を洞察することです。私たちはいったい、何をもってそれを「正義」と呼んでいるのか。これを欠いてはもはや「正義」とは呼べなくなってしまう、その意味の中心は何なのか。その本質的な条件を見つけ出すのが本質観取の営みなのです。

と、このように言くと、何やらものすごくむずかしいものであるように聞こえてしまう

かもしれません。

でも、本書をお読みいただければ、そして少しずつ経験を重ねれば、きっと多くの方ができるようになるはずです。

筆者たちは、これまで、保育園、幼稚園、小・中学校、高校、大学、企業、市民グループなどで、のべ何千人もの人たちと本質観取の哲学対話を重ねてきました。その経験を通して、ちゃんとコツさえ押さえれば、老若男女を問わず、ほとんどの人が本質観取ができるようになることを実感しています。

「哲学対話」の先へ

近年、いわゆる「哲学対話」と呼ばれる対話の実践が、世界中に広がっています。カフェや学校、企業などで、まさに「幸せ」や「自由」や「教育」など、さまざまなテーマをめぐって、人びとが集まり対話を重ねています。

本質観取の対話も、そうした哲学対話の一つです。

ただ、一般的な哲学対話は、右に述べたような「本質」を見出すことを必ずしも目的にしているわけではありません。人によってさまざまな考えがあることに気づいたり、前提

を問い直したり、自分自身を振り返ったりすることに、重きを置いている場合が比較的多いのではないかと思います。

それはそれとして、意義のあることです。思考の多様性に触れること、そのことで、自分自身を見つめ直すこと、これまで自分が正しいと思っていたことが、必ずしもそうではなかったと気づくこと。そうした経験は、とても重要です。本書で紹介する本質観取の哲学対話にも、そのような側面はもちろんあります。

ただ、私たちとしては、その上でさらにもう一步、対話を深めることの意義と重要性を本書で強調したいと思っています。

それはつまり、対話を通して、誰もができるだけ深く納得できる『共通理解』を見出し合うことです。多様な人の多様な考えに触れるだけでなく、その上でなお、誰もが深くうなってしまうほどの、本質的な考えを見出し合うこと。そんな対話が可能であるということ、本書では示したいと思います。

本文でも紹介する通り、私たちはこれまで、多国籍、多文化、多言語の人たちとも、本質観取の対話を重ねてきました。その経験を通して、文化や宗教や言葉が違う人たちの間でさえ、深い『共通理解』を見出し合うことができることを実感してきました。

これは対話の、大きな希望ではないかと思えます。

私たちは時に、「ま、考え方は、人それぞれ、だよな」で対話を終わらせてしまうことがあります。もちろん、それでいい場合もあるし、人それぞれ、の考えを知る対話にも意義はあります。

でもそのような対話ばかり続けていると、いつかは対話の希望を失ってしまうかもしれません。どれだけ話し合っても、結局、結論が、人それぞれ、なのであれば、何のために対話を重ねてきたのか、よく分からなくなってしまうからです。

何より、私たちの人生には、また社会には、人それぞれ、ではすまされない場面が多々あります。異なる考えの持ち主たちが、対立を克服し、共に生きるためには、共通了解、を見出し合わなければならぬ時があるのです。

いま世界中で取り組まれている「哲学対話」も、対話の結論を、人それぞれ、で終わらせるようなことはあまりありません。ただ、先述したように、必ずしも、共通了解、を目指すことに重きを置いているわけでもありません。むしろ、共通了解、や、合意、を目指すことには、一種の暴力性が潜む場合もありますから、そのことに自覚的であろうとする哲学対話の実践が主流なのではないかと思えます。

この自覚はとても重要です。哲学対話の場で、無理強いされた合意などあつてはなりません。

そこで私たちは、この合意形成に伴う暴力性をも克服する形で、いかに人びとが「共通理解」を見出し合えるのかについても論じたいと思います。ぜひ、本書全体を通して、その原理と方法をつかみ取っていただければ幸いです。

本質観取の対話の意義

本論に入る前に、これからご紹介する本質観取の対話の意義を四点記しておきたいと思っています。

第一に、「自己理解」が深まること。

たとえば「幸せ」の本質観取をする中で、私たちは、「ああ、自分は幸せをこんなふうと考えていたんだな」と、改めて自分自身の価値観や感受性を発見することがあるはずです。独りよがりな考えを持つていたんだなと気づくこともあれば、逆に、人と違うユニークな魅力に気がつくこともあるでしょう。

第二に、「相互承認」の感度を高め、「共通理解」を見出す力が鍛えられること。

本質観取の対話をしていると、しばしば、自分とはまるで異なる価値観や考え方に会います。でも、本質観取を共にするためには、私たちはまずはそんな違いを認め合う必要があります。その上で、互いの違いを超えてなお共通了解可能な本質を見出そうとする必要があるので。

「相互承認」と「共通了解」は、今後本書を貫く重要なキーワードになります。

ちよつと大げさに聞こえるかもしれませんが、これは民主主義の成熟や、世界平和にさえ寄与することだと私たちは考えています。平和というのは、とどのつまり、暴力ではなく、言葉を交わし合うことでしか実現し得ないものだからです。

世界では、いまま戦争や紛争が後を絶ちません。争いをなくすための方法は、原理的には次の二つだけです。一つは、圧倒的な力を持った巨大権力が、その他の人びとを服従させ、支配すること。もう一つは、互いを対等な存在と認め合い、その上で、たえず対話による合意形成を目指していくことです。

もし前者を望まないなら、私たちは、相互承認の精神と共通了解を見出す力を身につけていくほかありません。

本質観取の対話は、まさにこの相互承認の精神と共通了解を見出す力を育む、またとな

い経験になります。大人にとっても、子どもにとっても、この経験の意義はどれだけ強調してもしすぎることはありません。本質観取とは、「共にによりよく生きる」ことを目指した、またそれを可能にする対話実践でもあるのです。

第三の、そしてより身近な実践的意義も挙げておきたいと思います。

学校や会社、地域コミュニティなどで本質観取の対話をする、互いのことを深く知り合えるだけでなく、共通の目的が改めてはつきりと自覚されたり、共通言語を獲得したりできるようにあります。

たとえば、「私たちの学校が最も大切にすべきことは何だろうか?」といった問い。その本質を、教職員がみんなで言葉にして編み上げていくことができたなら、その学校で本当にやるべきこと、より深めていけること、あるいはやるべきでないことなどについて、さらに対話を重ねていくこともできるようになります。

あるいは、企業理念や経営理念の本質観取をすることも可能です。

たとえば、ある銀行が企業理念として掲げる「お客さま第一主義」の本質観取を、かつてその銀行の幹部の方々としたことがありました。

対話が始まってすぐにみんなが驚いたのは、人によって、あるいは部署によって、「お客さま」のイメージも違えば、「第一主義」の意味の理解も、まるで違っていたことでした。

そこで改めて、その本質はいったい何なのか、みんなで言葉にしていきました。その過程で、その銀行が本当に大事にすべきことは何なのか、はつきりと見えてきたのです。しかもその言葉は、参加者全員で一步一步つくり上げたものですから、誰にとっても深く自分のものゝなっている。

学校や企業などの目的を改めて言語化することで、目指すべき方向を共に見定める。本質観取は、いわばチームの力を最強度に高めるための、きわめて意義深い対話でもあるのです。

最後にもう一点、当然のことと言えば当然ですが、本質観取の対話を続けていけば、思考力、言語力、対話力が格段に上がっていきます。本質観取の経験を積み、人に伝わる言葉の紡ぎ方や、人の言葉を上手に受け止め、よりよい考えをさらに練り上げ合う力などが身についていくのを実感するはずですよ。

言葉の力を育むための道は、大きく二つです。

言葉をためること、そして、交わし合うこと。

言葉をためるためには、やはり読書が有効です。他方、本質観取の対話においてもまた、自他の腑^ふに落ちる、洗練された言葉の使い方を学んでいくことができるようになります。他者の言葉に耳を傾け、また言葉を交わし合うことで、「なるほど、この時にこんな言葉の使い方をすれば、多くの人の納得感が生まれるんだな」といったことを、繰り返し学ぶことができるのです。

言葉を聴き合うこと、そして、意を尽くして表現し合うこと。その経験を重ねることを通して、私たちの思考力、言語力、対話力は、格段に鍛えられていくはずです。

本書を通して、ぜひ多くの方に、本質観取に取り組んでいただければと願っています。何より本質観取は、とても楽しいものです。その楽しさもまた、本書ではお伝えしていけたらと思っています。

それでは、『本質観取の教科書』本編に入っていきます。

目次

序章 何のための本質観取か？

本質観取とは何か？

〃本質〃とは何か？

「哲学対話」の先へ

本質観取の対話の意義

第1部 理論編 本質観取を理解する

第1章 本質観取を知る

哲学的思考の核心

哲学対話とは？

哲学―対話のジレンマ

哲学とは何か？

哲学対話の真髄

上手に問いをつくる

相互承認を支える共通了解

第2章

哲学の始まり

共同体を超える哲学

神話は「物語」、哲学は「原理」

自由に表現する哲学者

物の見方は、人それぞれ？――人間は万物の尺度である

「○○とは何かね？」――ソクラテス―プラトンによる「本質」を問う方法

共通了解のつくりかた

第3章 共通了解の原理

プラトンの限界

プラトン「イデア論」の意義

デカルトの懐疑

現象学的還元——すべては〈私〉の確信である

現象学的還元の意義を問う——改めて「相互承認」と「共通了解」へ

本質観取とは何か——基礎理論編

第2部 実践編 やってみよう！ 本質観取

第4章 本質観取のやり方

名人芸にはコツがある

本質観取の手順

(0) テーマ決め／グランドールの確認

(1) 問題意識の確認と目線合わせ

(2) さまざまな体験例、具体例を出す

(3) キーワードを見つける

(4) 本質を言葉にする

(5) 最初の問題意識や、途中で生まれてきた疑問点に答える

学校での実践

言語教育における本質観取の意義

自身の偏見に気づく

企業における本質観取の意義

科学技術の未来のために

「書く」ことについて

本質観取のワークシート

第5章 ファシリテーターに挑戦しよう

よきファシリテーターはよき「共同探求者」である

よきファシリテーターはよき「質問者」である

人数の工夫

場を信頼する

(0) テーマ決め／グランドルールの確認

(1) 問題意識の確認と目線合わせ

(2) さまざまな体験例、具体例を出す

(3) キーワードを見つける

(4) 本質を言葉にする

(5) 最初の問題意識や、途中で生まれてきた疑問点に答える

ファシリテーションのコツまとめ

第6章 本質観取の実例

【事例1】「自立」とは何か？

(1) 問題意識の確認と目線合わせ

(2) さまざまな体験例、具体例を出す

(3) キーワードを見つける

(4) 本質を言葉にする

(5) 最初の問題意識や、途中で生まれてきた疑問点に答える

【事例2】「幸せ（ボヌール）」とは何か？

第7章 子どものための哲学（P4C）／

ソクラテイク・ダイアローグ（SD）

子どものための哲学

場の安全性——誰もが安心して対話する空間をつくる

コミュニティボール（ぬいぐるみ）の役割——傾聴と安心感のシンボル

ファシリテーターの仕事——沈黙を受け入れ、流れについていく

問いを問う——関心を共有し、問いを仕上げる

ソクラテイク・ダイアローグ

終章 本質観取は哲学の本質である

228

本質観取が描く未来

民主主義社会の成熟に向けて

「一般意志」の原理

「共生の原理」としての本質観取

「相互承認」と「共通了解」の深い意味——多様性を支える普遍性

共に「よりよく生きる」ために

あとがき

245

引用・参考文献

248